

四月七日投票の北海道知事選で、前々張市長の鈴木直道氏が元衆院議員の石川知裕氏を下して初当選した。鈴木氏は三八歳。戦後の全国の歴代知事で四番目の若さで、現役知事としては最年少。また、市町村長経験者が北海道知事になるのは初めてだ。全国唯一の財政再生団体のかじ取りをしてきた経験と、その若々しい感性を道政運営に生かしてくれることを期待したい。

今回の知事選の過程を眺めていて、驚いたことがある。今年一月、自民党道連の知事候補選びで、経済界や同党道議、市町村長の多くが国土交通省の局長を推して調整が難航する中、鈴木氏は先んじて無所属での出馬を表明。自民、公明両党に推薦を要請し、与党候補となる道を自ら切り開いた。

また、推薦を受けた公明党の女性が多く集まる集会では、母子家庭から都職員、夕張市長となり、知事選出馬を決断するまでの自らの苦労話を語り、聴衆の涙を誘った。世論調査などで女性から広く支持を得られているとみると、選挙戦で「北海道独立宣言」をキャッチフレーズに掲げた石川氏を念頭に「国と北海道と市町村がスクラムを組んで課題を解決しなければならない」と現実路線を強調。自らが置かれている状況を冷静に分析し、それに応じた言動を選び出す鈴木氏の「政治的嗅覚」の鋭さを感じた。

一方で、選挙戦での訴えを聞いても、鈴

鈴木直道・新知事誕生

木氏が知事として何を実現したいのか、よく分からなかった。公約に、外国人観光客年間五〇〇万人、道産品輸出年間一五〇〇億円の達成を掲げたが、これらは道が既に設定している目標そのもので、鈴木氏が知事になってもならなくても目指していた数字だ。

争点となった、カジノを中心とする統合型リゾート施設（IR）の誘致の是非については「道の『基本的な考え方』もベースに、道民目線で早期に判断する」、JR北海道の路線見直し問題は「道民目線で公共交通を再編する」として、具体的な対応について言及しなかった。

IRの誘致について、道の基本的な考え方では前向きな姿勢を示しているが、報道機関の道内世論調査では反対が半数を占める。路線問題についても、存続を望む地域住民が多い一方で、存続のために必要な自治体の財政負担に対しては反発も根強い。人口八千人台の夕張市に対し、道内全体は約五三〇万人。夕張市のように市民との直接対話で課題解決に取り組む手法は、道のトップとしては難しい。「道民目線」という言葉はきれいだが、その多方向に及ぶ目線をどうやってくみ取り、これらの問題を判断するのか、鈴木氏の今後の対応に注目したい。

一方、石川氏は「カジノ反対」「路線存

続へ努力」「脱原発」と争点への姿勢を明確に示していたが、世論調査や出口調査の結果をみると、これらの主張に賛同する有権者も鈴木氏に投票する「ねじれ」が生じていたようだ。政策以上に鈴木氏の若さや清新さへの期待が大きかったとの見方もあるが、野党候補の擁立が遅れて石川氏の名前や政策が浸透できなかったとも言える。

立憲民主党などは衆院議員の逢坂誠二氏を知事候補の本命としながらも、説得に失敗。鉢呂吉雄参院議員、会社経営者らにも断られ、二月になってようやく石川氏擁立が決まった。この出遅れが鈴木氏一六二万票、石川氏九六万票という結果につながったのではないか。年が明ける前に候補を決めて全道行脚などを始めていれば、もう少し違う闘いになっていたかもしれないと思う。

四月二三日にスタートする鈴木道政。まずは公約実現に向けた態勢整備のため、副知事をはじめとした特別職人事が控える。そして六月後半に開会予定の定例道議会では、JR問題やIR誘致の是非などが焦点になるとみられ、野党道議の厳しい質問も予想される。質疑応答を一言一句すり合わせる答弁調整をどう改善するのかにも関心が集まる。道庁も道議会も、新知事を温かく迎える「ハネムーン期間」はなさそうだ。

ハ魚V